

乾いた別れ

佐川 徹

さがわ とおる / 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科博士課程、AA 研短期共同研究員

ダサネッチと暮らしていて、彼らの自己主張の強さ、主張の執拗さ、主張する際の呵責なさに、辟易することしばしばである。しかし同時に彼らは、ときにあっさりと自分の要求を取り下げたり、相手の要求を受け入れたりする人びとでもある。この一見矛盾したふたつの接し方の並存にこそ、牧畜民が醸し出す強烈な魅力の秘密があるのかもしれない。



ダサネッチの集落のようす。2006年は蚊が大量発生したので、政府から支給された蚊帳を家のまえに張って快適に夜を過ごす。



婚資である家畜の授受について交渉する人びと。家のなかに入りきれなかった人は入り口のまえに陣取って参加する。執拗に要求をぶつけあうが、なぜか最終的に話はまとまる。

あふれ出る涙をこらえながら感謝と別れのことばをかけあい、いつまでも手を振る人びとに見送られながら、数日間過ごした村をあとにする。テレビの滞在型旅行番組でよく見かける感動的な別れの光景は、ダサネッチとの別れにはない。

ダサネッチは、エチオピア、ケニア、スーダンの3国国境付近に暮らす農牧民である。ぼくは彼らの集落で4回の調査をおこなってきたが、いつも別れの場面は似たり寄ったりだ。数ヶ月の滞在を終えて町に帰る日、荷造りを始めると知り合いが集まってくる。感謝と別れのことばを言いに来たのではない。執拗なねだりの要求に来たのだ。「その皿をくれると言ってたでしょ」、「次に来るときには鍋を買ってこい」。荷物の整理に忙しいぼくが「分かったからあとにしてくれ」と言っても、やむ様子が無い。こちらもいらだってきて、大声を出す。それでもやむ様子はない。

しかしぼくが家族との挨拶を終え、ザックを背負い町に向けて歩き出した途端、要求はやむ。ともに歩みを進めようという人もいない。十歩歩いて振り返ると、手を振っている人などいない。人びとはもういつもの仕事や遊びに忙しい。「ふっと切れた感じ」とはこういうことを言うのだろう。

ぼくは最初、この涙も見送りもない別れ、濃密なねだりのあとに突然訪れた乾いた別れにがっくりきた。フィールドの人と「深い」関係を築けていなかったことが、この乾いた感覚の原因だと感じたからである。しかし何度か滞在を重ね、幾人かとは親密な関係が築けたと自負できるようになっても、別れの光景は変わらない。ぼくは次第に、この別れの光景の中に、ダサネッチの他者との接し方のひとつの特徴が見て取れるのではないかと考えるようになった。

東アフリカに暮らす牧畜民は、「個人主義的な」人びととして知られる。ぼくもダサネッチと暮らしていて、彼らの自己主張の強さ、主張の執拗さ、主張する際の呵責なさに、辟易することしばしばであった。しかし同時に彼らは、きわめてあっさりとして自分の要求を取り下げたり、相手の要求を受け入れる人びとでもある。

別れの際の「ふっと切れた感じ」とは、彼らの接し方が前者から後者へ突然移行したかのようにぼくが感じたことから生じた印象であろう。そして、この一見矛盾したふたつの接し方の並存にこそ、牧畜民が醸し出す強烈な魅力の秘密があるのかもしれない。

では、この「矛盾」をどのように理解することができるのか。ぼくは、彼らが日常会話でよく用いる「胃が同じ／別だ」という表現に、それを理解するための手がかりがあるのではないかと感じている。

ダサネッチ語で胃や腹を意味するゲルは、その人の身体器官だけでなく、性格や感情、真意や生命などを表現する際によく用いられる。たとえば、「胃が腐った人」はけちな人、「胃が冷える」はなにかに満足したこと、を意味する。各人はそれぞれ異なる「胃」をもち、ちがう性格で、別様な感情の抱き方をする。

ダサネッチは、自分が他者と、あるいは他者が自分と異なった主張や行為をすることを説明する際に、「自分の胃と他者の胃は別」であり、なにを行うかは「自分／他者の胃だけが決定する」と述べる。逆に、他者になにかをお願いしたり、ともに行為することを誘う時には、「われわれの胃は同じだろう」と呼びかける。たとえば、次のような事例である。

同じ村でともに暮らしている男性が、「穀物がもうない。これからなにを食べればいいのか」と金をねだりに来た。ぼくが「あなたの穀物貯蔵庫は近くのラテ村にあるから、それを開ければいい」と言うと、「一度開けるとラテ村の住人が盗んでいく」と答える。さらに「貯蔵庫の前にはあなたの娘夫婦の家があるから心配ない」と言うと、「娘といっても胃が別だ。腹が減れば盗む」と返す。ぼくが「どうしたらいいのかなあ」とはぐらかしていると、「われわれの胃は同じだろう、どうしてくれないのか」と怒ったように言う。

この事例では、ぼくが「娘から助けを求められるだろう」と指摘してねだりを拒絶したのに対して、相手は娘であつてもいまは離れて暮らし

2回目の調査のときから親しくしているふたりの友人。いつもねだられてばかりなので、あるとき「ウシをくれ」、「ヒツジをくれ」と軽い気持ちでねだったら、あっさりくれた。



ているために「胃は別」であり、いま近くで暮らしている自分とおまえこそが「胃が同じ」であると述べることで、自分の要求が正当であることを主張している。次は、逆に「胃が別」なことが強調された事例である。

ある世代組に属するひとりの男性が死んだ。死者が飼養していた去勢牛は屠殺してその肉を死者の世代組仲間が共食することになっているため、共食儀礼が開かれた。この儀礼には、参加可能な世代組仲間は出席すべきだとの共通認識がある。しかしXは参加せず、木陰で寝そべるばかりだった。翌朝ある年長者に「なぜXは来なかったのか」と尋ねると、「彼の胃は別だ。彼の胃は望まなかったのだ」と答えた。さらに「しかし同じ世代組なのだから、儀礼に参加すべきだろう」と聞くと、「彼の胃は泣いているのだ。わたしと彼の胃は別なのだ」と述べた。

年長者の説明によれば、その男性

は自分の父方オジに呪詛されて死んだ。Xは彼と非常に親しい関係を築いていたため、その死の経緯に強い悲しみを抱いており、儀礼への参加も拒んだのである。

多くの東アフリカ牧畜社会で世代組は重要な社会組織であり、同じ組に帰属する成員はさまざまな経験をともにする。しかしこの事例では、同じ組の成員でも儀礼の契機となった人物の死亡への感情の抱き方が異なり、それが各成員の儀礼への参加／不参加を決定付け、また各人が相互の決定を尊重していることが示されている。

同じダサネッチでも、みな異なる「胃」をもつ。しかし、ともに生活をしていくなかで、「われわれの胃は同じだろう」と言える関係性が築かれる。その関係性が、ともに行為をしたりなにかを要求するときの論拠になる。しかし同時に、各人はともにした経験を他者が別様に解釈する可能性があることも分かっている。

る。だから「胃が同じだろう」と誘いをかけても、相手が「わたしの胃は別だ」と言って同意しなければ、最終的にはそれをただ受け入れる。

ぼくは、「胃が同じ／別だ」という表現の含意に思いをめぐらすことで、ダサネッチの一見矛盾した他者との接し方を、少しは理解できるようになった気がする。たとえば、別れの場面の「ふっと切れた感じ」は次のように考えることができるのではないか。この男は、いままでともに暮らして多くの経験を共有したのだから、わたしになにかを与えてくれるべきだ。それを要求することは当然だ。しかしもうこの男が立ち上がり歩き始めたら、それを妨げて要求することはできない。もう行くことを「彼の胃が決めた」のだから、彼の行く道を遮るべきではない。

乾いた別れの光景は、ダサネッチ同士の別れの場面でも同じだ。家畜とともに遊動的な生活を送っている彼らは、新たな放牧地を求めて頻繁

に移動する。今日の隣人は明日には別の土地へ移動していくかもしれない。もちろん、移動するか否かを決定するまでには議論がなされる。しかし、一度本人がそう決めたら、周囲の人はその決定を受け入れて、彼の行く道を祝福するだけだ。ぼくが旅立つ際にも、「おまえの道がカミとともにあるように」という、簡潔だがなにも不足することのないことばで、「父」が祝福を与えてくれる。

濃密さのあとに突然訪れるこの乾いた感覚は、炎天下のサバンナを歩いたあと木陰に入ったときに感じる、あの心地よい清涼感に似ている。冷えた地面と涼やかな風が、汗だらけの身体を一瞬で乾かしてくれる。その激しい自己主張にしばしば辟易させられながらも、なぜか別れたあとに「鷹揚で心地よい人びと」という印象が強く残る秘密は、他者の「胃が決めた」ことを最後にはただ受け入れる、ダサネッチの引き際の見事さにあるのかもしれない。